

団塊力

DANKAY-RYOKU

テーマ別市民会議報告書

武蔵野市第四期基本構想・長期計画

テーマ別市民会議「団塊世代の主張」

平成16年5月

目次

はじめに	-----	3
提言（総論）	-----	4
提言（テーマ別各論）		
1 生きがい	-----	7
2 健康	-----	8
3 家族	-----	10
4 仕事	-----	11
5 コミュニティ	-----	12
6 生活	-----	15
おわりに ～ 2015年へのメッセージ	-----	18
資料		
1 「団塊世代の主張」市民会議での話し合いチャート図		20
2 第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」設置要綱		26
3 第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」委員名簿		27
4 第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」会議経過		28

はじめに

1947年から49年にかけて生まれたベビーブーマーたちは「団塊の世代」と呼ばれ、過密教室での勉強を経て、1960年代のテレビの普及、1980年代のマイカーの普及、1990年代のパソコン・インターネットの普及という、戦後日本の時代の変化の最先端を突っ走ってきた。大学紛争（闘争）の当事者でもあった団塊の世代は、一方で、既成の価値観を問い直し、「自己本位」で多様な生き方を模索してきた世代であったが、他方では、高度経済成長期に青年期を過ごし、バブル期の企業活動の第一線を担った世代でもあり、資源・環境問題や企業モラルという点で多くの負債を後に残したと、後世に評価される世代であるかもしれない。

また、「団塊」という量的な多さは、昭和24年生まれが65歳となる「2015年問題」を新世紀の福祉分野に課題として迫っている。2002年現在2,363万人である65歳以上人口は、2015年には3,277万人となり、900万人以上の増加により、高齢化率は26%に達する。介護保険制度が始まって3年経過したが、全国的に、要介護認定者数は高齢者数の伸びを上回る勢いで増加しており、2015年へ向けて、自助・公助・共助のバランスの取れた福祉環境を構築することが求められている。

武蔵野市では、「新世紀の豊かな地域社会を考える」委員会答申を受けて、いち早く、1999年からテンミリオンハウス事業を開始し、住民自身が共助によって地域の福祉環境を向上させる取り組みを始めている。この報告書では、団塊世代である各委員の自由な意見交換に基づいて、自分自身の老後の充実した生活をどのように展望しているか、そのために個人としてはどのような備えをするか、また、行政施策として何を期待するか、等についてまとめたものである。

団塊世代の平均的な傾向については、同時期に並行して行われた「武蔵野市団塊世代市民アンケート調査」の結果で明らかになっているので、本会議では、各委員の個別的な見解を尊重して、多様な生き方を模索する団塊世代のある特徴の一端を明確に示すことを大切に、提言第一部を委員による「テーマ別各論」とした。

本会議は平成15年12月9日の第1回から平成16年5月18日の第5回まで合計5回開催し、その間に福祉施設を中心に市内施設見学を行った。

本報告書は委員全員で分担して草案を執筆し、それに基づいた検討を第4回目に行い、メール等での委員相互の意見調整と第5回目の検討を経て最終的に座長がとりまとめたものである。

I 提言(総論)

- 団塊力活用計画「DANKAプロジェクト」を立ち上げよう -

団塊力……「団塊」(マス)としての圧倒的な存在感をもって
時代を切り開いてきた、私たち世代のポジティブなエネルギー

「団塊世代の主張」市民会議での話し合いの概要は、資料1で示した「団塊世代の主張」市民会議での話し合いチャート図にあるとおりである。

チャート図は、生きがい、健康、家族、仕事、コミュニティ、生活(個人、人間関係、趣味、文化)の6つのテーマで話し合った内容をリアルタイムでまとめたものである。その中で出てきたキーワードを、本市民会議で考えた3つの計画「カムバック武蔵野計画」、「地域活性化計画」、「団塊力活用計画」に沿って整理してみた。

「団塊世代の主張」市民会議キーワード

1 カムバック武蔵野計画…まず「地域発見」からスタート

団塊カフェ 自主財源で運営し、地域での居場所づくり、溜まり場づくりをサポート

カムバック武蔵野パーティ 武蔵野市民社会福祉協議会・ボランティアセンター主催の
「お父さんお帰りなさいパーティ」の団塊世代版などによるボランティア・NPO活動への誘い

お役立ち団塊事業団 非営利サービス活動の創出

団塊防災組 で地域防災への出番づくり

カムバック武蔵野マップ 団塊市民御用達のポイントが載った地図でご近所開拓

リタイア後は「所属」「役割」「人間関係」の再構築 が必要

2 地域活性化計画・・・自由な居住空間・なじみの人間関係・家族的な雰囲気・住み慣れた地域での生活・日常生活における自由な自己決定等が可能な「尊厳ある生活」を!

団塊サロン を空き教室に。 **団塊大学** やメンバーが講師になる「人の話を聞こう会」

生涯学習 や、お祭り・文化祭。若者と一緒に学ぶ楽しみ。展示即売もできるといい。

学校支援ボランティア 団塊世代が講師役などで授業をサポート。

介護付き旅行 や思い出旅行など同世代で旅を楽しむ。 **団塊マネー** 地域通貨の試み。

地域包括ケア 在宅介護を可能にする小規模・多機能サービス拠点をそれぞれのサービス圏域に。

健康管理事業 で「健康と美」をサポートするビジネスの展開(健康管理手帳の販売も)

地域の薬局・薬店を **まちかど介護相談所** に。 様々な年齢層が「暮らし」を共有するグループ

ホームの実験 **老・壮・青ミックスホーム** なぜ今、 **超高級老人ホーム** が、

注目されるのか。 **高齢者の尊厳を支えるケア** であってほしい。

3 団塊力活用計画・・・「生活をするための仕事から、生活を楽しむための仕事へ」

納税する高齢者 でありたい。

生きがいプラス収入のある活動 をしたい。

介護つき観光バス **ノスタル爺さん号***

空き店舗活性化事業

団塊テンミリオンハウス** を拠点に共助サービスで行政をバックアップしたい。

団塊協同組合 世代内相互扶助システム。

団塊市民SOHO事業

団塊パワーを組織化して **社会的発言** や **政策提言** をしたい。

拠点 がほしい。

DANKAIプロジェクト

(注) * 「ノスタル爺さん」；やなせたかし氏CDより

** 「テンミリオンハウス」：武蔵野市が年間1千万円(テンミリオン)を限度として補助し市民等が運営する地域福祉活動拠点

カムバック武蔵野計画で、リタイアした団塊世代を地域にカムバックさせる。団塊世代にとって地域は「戻る」場ではなく、むしろ「ひとつひとつ発見していく場」との感覚であろうという指摘が本市民会議であり、委員全員が同感した。地域での居場所づくり、溜まり場づくりをはじめ、「カムバック武蔵野パーティー」など多様な仕掛けを用意して、リタイア後の所属・役割・人間関係を再構築することが、団塊世代の豊かな老後の生活にとっては必要である。団塊世代が地域にカムバックする目安となるよう、様々な居場所やボランティア・NPO団体の活動拠点などを盛り込んだ「カムバック武蔵野マップ」を作成したり、あるいは、市民の関心が高い防犯・防災活動への出番を「団塊防災組」として組織するなどのアイデアは、すぐにでも実現したいものである。

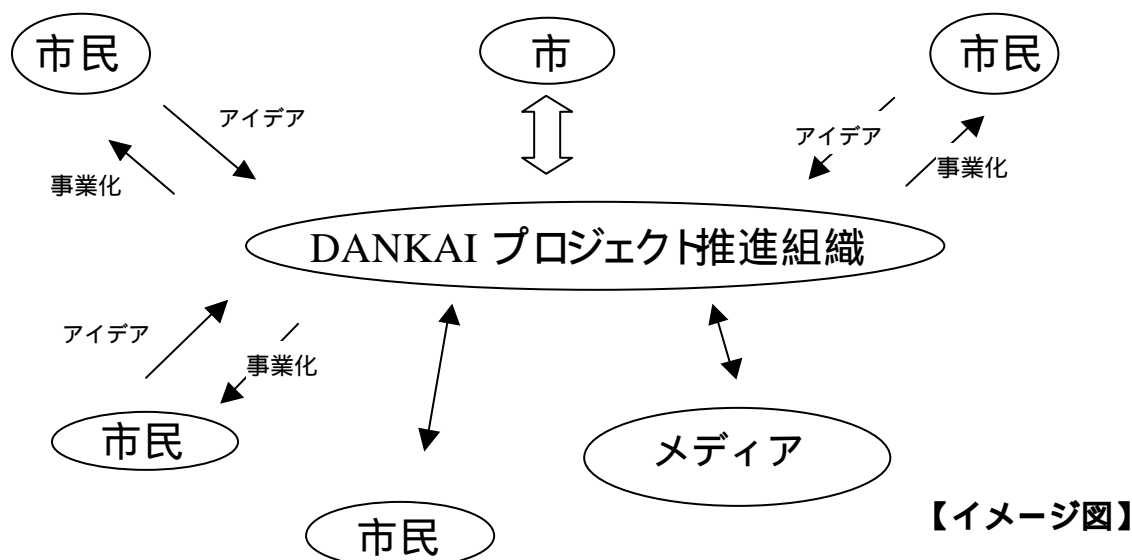
次に、地域活性化計画で、団塊世代の老後の生活についての不安を一掃する。武蔵野市のユニークな地域福祉活動施策の一つであるテンミリオン事業をさらに拡充させ、学区域に1つ以上のテンミリオンハウスを開設し、それらを小規模・多機能サービス拠点として活用して在宅介護を可能にする「地域包括ケア」を実現してほしい。例えば、地域の薬局・薬店が「まちかど介護相談所」として地域ケアシステム加わることも考えられる。団塊世代は老後においても、自由な居住空間・なじみの人間関係・家族的な雰囲気・住み慣れた地域での生活・日常生活における自由な自己決定等が確保された「尊厳ある生活」を求めている。

最後に、団塊力活用計画である。上記のキーワードを見て気付くことは、団塊世代が各自の個人的なレベルで、豊かで安心な生きがいのある老後を展望するだけでなく、これまでに培ってきたキャリアをリタイア後にも活かして、広い視野の中で、収益を出せる様々な事業を起こし、税金を納め、コミュニティを支えることで、地域社会の福祉と文化向上に貢献したいという熱い思いを持っていることである。本市民会議の話し合いでも、福祉

サービスの受け手という立場ばかりでなく、自らも何らかの多様なサービスの提供者でありたいという、積極的な意見が全員から出されたことは非常に印象的であった。チャート図（資料1 - 4）には「圧力団体」という言葉があるが、団塊としての存在を意識した社会的発言や政策提言を行う積極さを多くの委員が持っていた。地域にカムバックし、キャリアを活かす仕事を通じて社会貢献をしたいという、意欲とエネルギーと能力を持つ団塊世代の志（こころざし）と熱意を行政がうまく受け止めて、そうした思いの実現のために役立つサポートの仕組みを、2015年までの早い段階でつくることを本市民会議は提案する。

キーワードの中にも、「健康と美」をサポートする「健康管理事業」をはじめ、多様なサービスを楽しんできた団塊世代らしいユニークなプランが提案されている。それらのプランやアイデアを個別に吟味して実現に向けての努力をすることも大切であるが、本市民会議では、そうした個々のプランやアイデアをつなぐ具体的な仕組みとして「DANKAIプロジェクト」（仮称）を立ち上げることを提案したい。

「DANKAIプロジェクト」を立ち上げよう



市民から提案される個々の事業プランや活動アイデアを受け止め、行政や企業、メディアなどの関連団体につないで事業を具体化していく活動を「DANKAIプロジェクト」と呼び、それを展開する組織を、当面「DANKAIプロジェクト」推進組織とする。

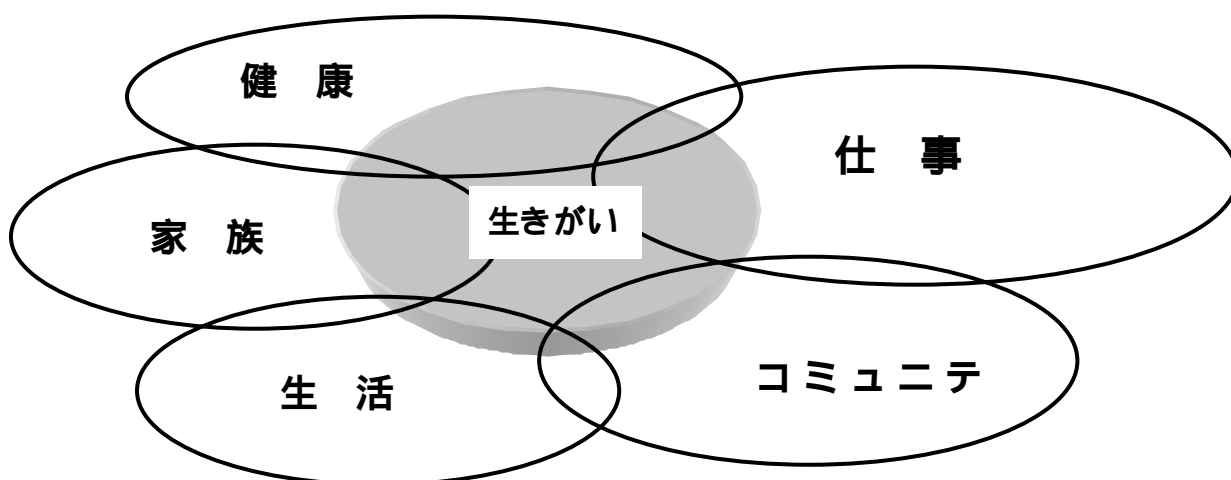
テンミリオンハウスが構想当初、高齢者だけでなく、各年齢層の地域住民全体を利用対象者としていたことを考えると、「こどもテンミリオンハウス」と同様の考え方で「団塊テンミリオンハウス」という拠点をつくり、そこに「DANKAIプロジェクト」推進組織を設置するという案も魅力的である。

「DANKAIプロジェクト」構想の詳細は、「提言（テーマ別各論）」の「5 コミュニティ～団塊力活用計画」をご覧ください。市民のアイデアを募集し、それらを事業にまで展開していく「団塊力」が発揮されれば、武蔵野市は必ずや変わるであろう。

「団塊力」の行方やいかに・・・？

Ⅱ 提言(テーマ別各論)

第1回の話し合いでは、団塊世代の一員としての思いを自由に語り合ったが、その内容を「生きがい」を中心として、それにつながる「健康」「家族」「仕事」「コミュニティ」「生活」の6つのテーマで整理しながらチャート図を作成した。その図をもとに、テーマ別に各委員が執筆した草案を吟味しまとめたものが第 章である。



1 生きがい

人は、人生を終えるまで、いつまでも「元気」で「現役」で、「生きがい」をもって生き続けたいと願っている。「個」としての多様な生き方を模索してきた団塊の世代が、高齢化を迎えるにあたって「生きがい」はより大きなテーマになると考えられる。私達の先輩である、現在の後期高齢者は、多くの悲惨な戦争を経験し、「生きがい」というより生きることに関心一杯で、「老後の楽しみ」を考える余裕もなく生きてこられた。「孫の成長を楽しみに生きています」「あの世にいる夫が迎えにくるのを楽しみに生きています」高齢者にお会いするとよく耳にする受身の「生きがい」の言葉である。しかし、戦後教育を受けた「団塊の世代」が高齢者となり、「生きがい」を持って生きてゆける社会作りには多様性が求められると思う。

まず、「生きがい」をもって生きてゆくためには、「豊かで、夢のある老後の実現」が必要である。「健康」「ゆとり」「趣味」「役に立ちたい」「旅行」「仕事」などがキーワードとなり、「豊かな、夢のある老後の実現」へ向けての仕組みづくりは、本会議の重要なテーマである。

「人生に定年はない」というものの、老後「どのように生きていくのか」「3～5年後、大量退職後、団塊世代は地域にどう受け入れられるか」、団塊世代はまだ元気だから、障害を持ったり年老いたりしたときの不自由さを実感しづらいが、果たして「いつまでも元気でいられるのか？」

健康であり、経済的にも精神的にもゆとりを持ち、好きな趣味を大切に、世の中の役に立ち、旅行などを楽しみながら仕事を続けられたら、こんな素晴らしい「ばら色に満ち

た老後」はないと思う。こうした夢が叶うと謳われている超高級老人ホームに関心が集まるのも理解できる。しかしながら、私は、理想に近いこのような老後の暮らし方は、「仕組みづくり」にポイントを置き、団塊の世代が智恵を出し合い地域で実現していきたいと考えている。

「健康」・・・予防も含めた健康教室の開催
「ゆとり」・・・衣食住のゆとりの確保（共同生活も含めて）
「趣味」・・・趣味があって充実した生活
「役に立ちたい」・・・新しいボランティアの考え方
「旅行」・・・障害を持っても旅行に行ける介護付旅行
「仕事」・・・団塊の世代同士での事業の立ち上げ

上記は、キーワードごとに、「生きがい」を実現するためのアイデアやしくみを例示してみたものである。

昔、末期癌の患者さんが読んだ詩に、次のような内容のものがあつたと記憶している。

- 私は、癌でベットから起きることも、寝返りさえうつことができない、
もう人の世話になるばかりで、人に何もしてあげることができない。
しかし、まだ、手を合わせることができる、手を合わせて、
神に人々の平和を祈ることができる -

たいへん感銘した私は、この詩から、「生きがい」「生きる意味」とは、心の持ちようによって違ってくることを感じた。

仕組みづくりには、「心の豊かさを大切にする」という視点も不可欠である。

2 健康

「息を引き取るその瞬間まで心身ともに健康でいたい」というのは万人の願いであろう。しかし現実には、大半の人が病院のベッドで亡くなるという今日、看護や介護を受ける期間をできる限り短くし、たとえ障害を持つようになっても最期まで生き生きと暮らすことを可能にする方策を考えたい。

ストレスを減らして健康を維持する重要性

健康を獲得し維持していくためには、「心」と「身体」の両面のケアが必要だが、ストレスの多い現代社会では、特に心を元気に保つことが最も重要である。「楽しみ」「生きがい」などは心を元気にしてストレスを減らし、免疫力を高める。同時にストレスが減れば血圧が下がり、脳卒中・心筋梗塞にかかりにくくなる。

リタイア後に、今まで蓄積したノウハウを活かして楽しみながら地域で仕事をする、有償のボランティアをすることによって人の役に立つ喜びを感じつつ収入を得るなど、生きがいを持つことが意欲的で元気な心を保ち、労働で体を使うことと相まって健康を維持することができる。

また、人間は、たとえどんなにささやかなものでも自分の「夢」が実現すれば生きる意欲を持つことができる。「夢を叶えるお手伝い」というサポートも大切な仕事である。例えば、某旅行会社が車椅子の女性の『流水を見たい』という夢を実現させるツアーを販売し成功させている。

健康管理事業と Aftercare Notebook(健康管理手帳)

自分1人で全ての健康管理を実行していくのはなかなか大変である。リタイアしたビジネスマンや医師、看護師、療法士、心理カウンセラー、スポーツトレーナー、美容研究家などが集まって、60歳以上の市民一人一人の「健康と美」をサポートする事業を始める(市民が負担する料金は民間の類似のものよりかなり安価にする。名称は例えば「トータル・ヘルス&ビューティ(Total Health & Beauty)」。この事業は主として管理と相談業務を行い、市内の医療機関やスポーツクラブと提携する。

まず管理を依頼する市民に健康管理手帳を販売する。手帳には個人の健康やプロポーションに関するデータを定期的に記入し、購入者が常に自分の心と体の状態をチェックできるようにする。

団塊世代による団塊世代向け

「トータル・ヘルス&ビューティ(Total Health & Beauty)」 サービス内容(案)

- 1 定期健康診断のデータ分析と詳細な解説、生活習慣病防止のためのアドバイス
- 2 加齢により将来予測される知的・身体的機能の障害を未然に防ぐための心の持ち方や運動のアドバイス(例えば、痴呆にならないために右脳を大いに刺激する生活をする。歩行困難、転倒を予防するための腹筋・背筋・大腿四等筋・大腰筋などの筋トレ)。
- 3 茶話会、食事会形式の楽しい健康セミナー
- 4 最新の医学情報の電子メールによる配信
- 5 美しいプロポーション、正しい姿勢、みずみずしい肌を作るためのトレーニングマシンを使う運動や食事や日常の手入れなどについてのアドバイス
- 6 ストレスを解消するために団体でするスポーツのグループづくりや仲間の紹介

以上のようなサポートを受けながら、健康づくりも「楽しみながらやる」ことが更なる健康増進へとつながると考える。

3 家族 ~ 団塊の世代にとっての家族 夫婦とは

「家族」とは両親とその子供を中心として原則として共同生活をしている集団を意味するそうだが、おそらく団塊の世代には兄弟を3、4人持ち、両親さらには祖父母も同居する三世同居生活の経験者も多いのではないかと思う。

しかし、私たち団塊の世代が親になり始めた頃から少子化傾向となり、いわゆる「核家族」といわれる家族形態に変化してきた。

現在では三世同居率は全所帯数の約1割程度しかなく、この現実を見れば団塊の世代の大多数は子、孫との同居生活ではなく夫婦単位、あるいは一人での生活を余儀なくされている、もしくは将来的に余儀なくされると思われる。

したがってここでは、団塊世代の「夫婦」のあり方について考えてみたい。

最近の新聞報道（2004年2月26日付「朝日新聞」）によれば、日本では離婚の2割は同居20年以上の夫婦で、また、55歳から60歳の妻のうち夫の退職を楽しみにしてきた妻は日本30%、米国60%、逆に憂鬱と思っている女性が日本では24%もいるとのことである。

この結果を見れば半数程度の女性は夫の退職をそれ程待ち望んでいないことになり、これから定年退職を迎える団塊の世代の夫は勿論のこと、妻側も充実した退職後の生活を送るためには退職前から相当な準備と心構えが必要と思われる。

「夫婦がよりよい生活を送る円満の秘訣」のパロメーターは、日頃、夫婦間でどの程度会話があるかによる - との説がある。退職者の半数程度が「お互いをいたわる」というどちらかと言えば抽象的な回答を出す一方、大学生からは「日常会話を欠かさない」「団樂の時間を持つ」「食事を共にする」など具体的な答えが寄せられた調査は興味深かった。ここにヒントがあると思う。

前に述べたように、妻の大半が夫の退職を余り待ち望んでいないようだが、団塊の世代の退職は間違いなくここ数年のうちにやってくるので、それまでの準備期間も含め夫と妻に多少独断的ではあるが次のような提言をしたい。

夫への提言

- (1) 退職後は先ず「会社人間」から「家庭人間」への脱皮をはかる。
- (2) 「家庭人間」としては妻の方が、はるかに先輩である故、映画に例えるなら妻は主演、夫は助演の気持ちで臨む。
- (3) 家庭内での基本的な役割分担を決める。例えば、食事後の片付けは夫の役割とか。(実際やってみると妻の大変さが実感される。)
- (4) 妻との共通の趣味や話題を必ず一つは持つ。
- (5) 退職者の半数は積極的に外に出ないとの事。その結果妻の負担がさらに増えることになり、それを減らすためにも積極的に家から出る事を勧める。くれぐれも、お昼時に自分の箸を持って食卓で昼食が出てくるのを待たないように。

妻への提言

- (1) 現在の中高年の労働環境の厳しさや、年金問題等不安定な時代の中で懸命に働いてきた(働かされてきた)団塊の世代の夫に対し、改めて尊敬といたわりの気持ちを持ってもらいたい。
- (2) 40年近く「会社人間」を務めてきた人間がそんなに簡単に「家庭人間」に脱皮は出来ないはずで、そこは妻の方も焦らず多少の猶予期間をみてもらいたい。
- (3) 妻からも夫の「退職後の自立」に向けて積極的に助言や後押しをしてほしい。

そのためにも、団塊の世代が参加できる新しい枠組みづくりや、組織づくりが武蔵野市にも是非とも必要と思われる。いずれにせよ、夫婦が「生活空間」を共有してこそ心のかような夫婦間のコミュニケーションが生まれると思う。それには、お互いの思いやりや感謝、尊敬の気持ちを実際の生活の中で「言葉」に出すことが一番大切な事なのではないか。

一方、団塊世代は、家族の多様なあり方を受け入れることが可能である。シングルという選択肢、「生活を共有する集合体」としての家族、気の合う者同士がグループホームで暮らすというライフスタイルなど、同じキャリアを持つ者同士や、高齢者から若者まで多様な人々が同居する「老・壮・青ミックスホーム」なども魅力的な形態であろう。

4 仕事

これからは、団塊世代を含めた多くの市民が定年を迎え、第2の人生をスタートすることになる。

この第2の人生の生活を支える上で、「年金」という収入は約束されているものの、受給者の増大により、年々、減額傾向にあり、「年金」だけでは安心感のある生活は望めないと聞いた声が多い。

また、定年を迎えたといっても、十分に働ける年代であり、永年培った知識・技術を定年という節目で埋もれさせてしまうのは、個人的にも社会的にも非生産性極まり無い事といえよう。

したがって、これらの問題を解決するものとして、定年後の仕事をどう作り出していくかが、個人にとっても社会にとっても、21世紀の最初の四半世紀における重要な課題と成り得る。

運良く、自己の経験による知識・技術で(或いはコネで)再就職できる者は少なからずいると思われるが、大半の者は無職という状態で第2の人生を迎えることになる。無職ながらも、個人の趣味や嗜好において、これを追求することにより「生きがい」を感じる者もいれば、ボランティア活動を通して「生きがい」を見出す者もいるであろう。

しかし、一方、こうした志向ではなく、今まで培った知識・技術、もしくはサービス能力を活かせる「地域社会に役立つ仕事」があったとしたら、多くの者が参画の意志を示す事が予想される。

それは、NPO的な性格のものになるだろうが、これを創造するためには、パワーのある団塊の世代等の事業アイデアを収集する仕組みづくりと、各分野の行政の後押しが不可欠といえよう。

例えば、各委員から提案された事業アイデアとしては、

1 「団塊協同組合」による事業化

営業や経理、技術翻訳など得意分野を持つ者が集まり「お役立ち団塊事業団」として地域のニーズを吸い上げてビジネス化する。対価に団塊マネー（地域通貨）を活用。

2 団塊市民SOHO事業

団塊市民が、個人やグループで地域のニーズを中心に独自の事業を展開。

3 商店街の空き店舗活性化

「団塊協同組合」や「団塊市民SOHO」の拠点として活用するなど地域を活性化する。

4 団塊世代向け旅行事業

世代が共有する思い出（の地）を訪ねる「思い出旅行」や、「介護付き旅行」など。

5 団塊カフェ

そこに行けば、誰かしら同世代に会える溜まり場。雑談から事業やイベントの発想も。

等があり、これらの事業をより効果的に運用するためには、企業との連携も重要な要因となるだろう。

5 コミュニティ ~ 団塊力活用計画」のすすめ

「定年後はどうする？ 何か考えている？」

最近、飲み屋で、同僚と、こんな会話がめっきりふえた

団塊の世代が定年退職して地域に戻るピークは2015年と言われている。

人生の大きな節目「定年退職」と正面から向き合う歳は、私たち一人ひとりの個人の問題だけでなく、全国の地方自治体の問題であり、すなわち我々が住んでいる「武蔵野市」の問題でもある。

カムバック武蔵野計画

絶対多数の団塊の世代が仕事を離れて武蔵野市に戻って来た時、コミュニティに何が起きるのか。「右を向いても左を向いても高齢者ばかりのコミュニティ」「大幅税収ダウンの

影響を受けた「市民へのサービスの低下」。オーバーかも知れないが当然予想されることである。その結果、これまでのような武蔵野市であり続けることができるのだろうか。私たち団塊を含め、市民は市に豊かな老後を請け負ってもらえるのだろうか。

武蔵野市のことだからきっとレベルの高い福祉を提供してくれるはず・・・などと甘い期待を持ってはいけない。日本はこれまで経験したことのない高齢化社会と遭遇しようとしている。頭の中は老後の不安でいっぱいである。

定年退職後、団塊の世代は『攻めの姿勢』で生きなければ幸せになれないと思う。

老後、介護、高齢化、など暗いイメージの言葉は捨てて、これまで通りポジティブに生きるべきだと思う。

ライフステージが地域に変わったからといってためらうことはない。地域のコミュニケーションスタイルになじめないと心配する向きもあるが、意識して合わせる必要もない。長い出張から地元に戻って来ただけのことである。それよりも、何よりも、団塊の世代には高度成長経済を推進してきたキャリアという強みがある。

世間の多くは退職帰還者に、趣味、スポーツ、習い事、ボランティアなど、いろいろと勧めてはくれるが、何かちょっと違うのではないか。気持ちはありがたいが「なじめない」と思う。年寄りには年寄りらしくとされているようで、どんどん老化してしまいそうである。悲しいかな団塊世代は退職しても仕事人間であり、現役でありたいと望む生き物なのだ。それがきっと幸せ創りにつながると思う。

退職したら発想を変えてみるのも面白い。

「生活をするための仕事から、生活を楽しむための仕事へ」

自分のキャリアは一生ついてまわる。退職したからといってキャリアを捨てる必要はない。逆にキャリアを活かして仕事を楽しくすることに方向転換してみるのはいかがでしょうか。何十年も遠ざかっていた趣味やスポーツを無理して始めるより、数倍ストレスになるはずである。「キャリアは一生の趣味なり」～市も熟練した貴重なキャリアが降って沸いたように集まってくるのだから、それを利用しない手はない。

市は団塊の世代の様々なキャリアを循環させて、武蔵野市で完結するビジネスモデルを創る必要がある。キャリアを活かす武蔵野市を創る義務がある。

このような団塊の世代向ライフステージが武蔵野市でシステム化され、団塊世代のキャリアを活かせる場を確保できれば、それによるメリットは計り知れないだろう。

そのメリットを活かせない地方自治体は衰退の一途をたどるのではないだろうか。

脅しではない。団塊世代は、キャリアを活かして、イキイキと生活できる、そんなシステムが完備した地域を求めて移り住んでいくはずである。

「高齢遊牧民」

そういう時代がすぐそこまで来ているような気がする。

ウエルカム キャリア

団塊世代のキャリアを活かすことのメリットをあげてみた。

最大の老化防止薬となる。老いてなおキャリアアップに挑む気持ちの張りが重要。それ

が脳を活性化させ病を撃退する。

キャリアを活かして地域のビジネスを活性化できる。

ビジネスが成立することによって税収以外の財源確保につながる。

高いレベルの住民サービスが実現できる。

武蔵野市への居住指向が高まる。

市が豊かに活性化する。

など、団塊世代のキャリアサポートは良いこと尽くめではないか。武蔵野市は高齢化社会のモデルコミュニティに向かって循環することができるはずである。

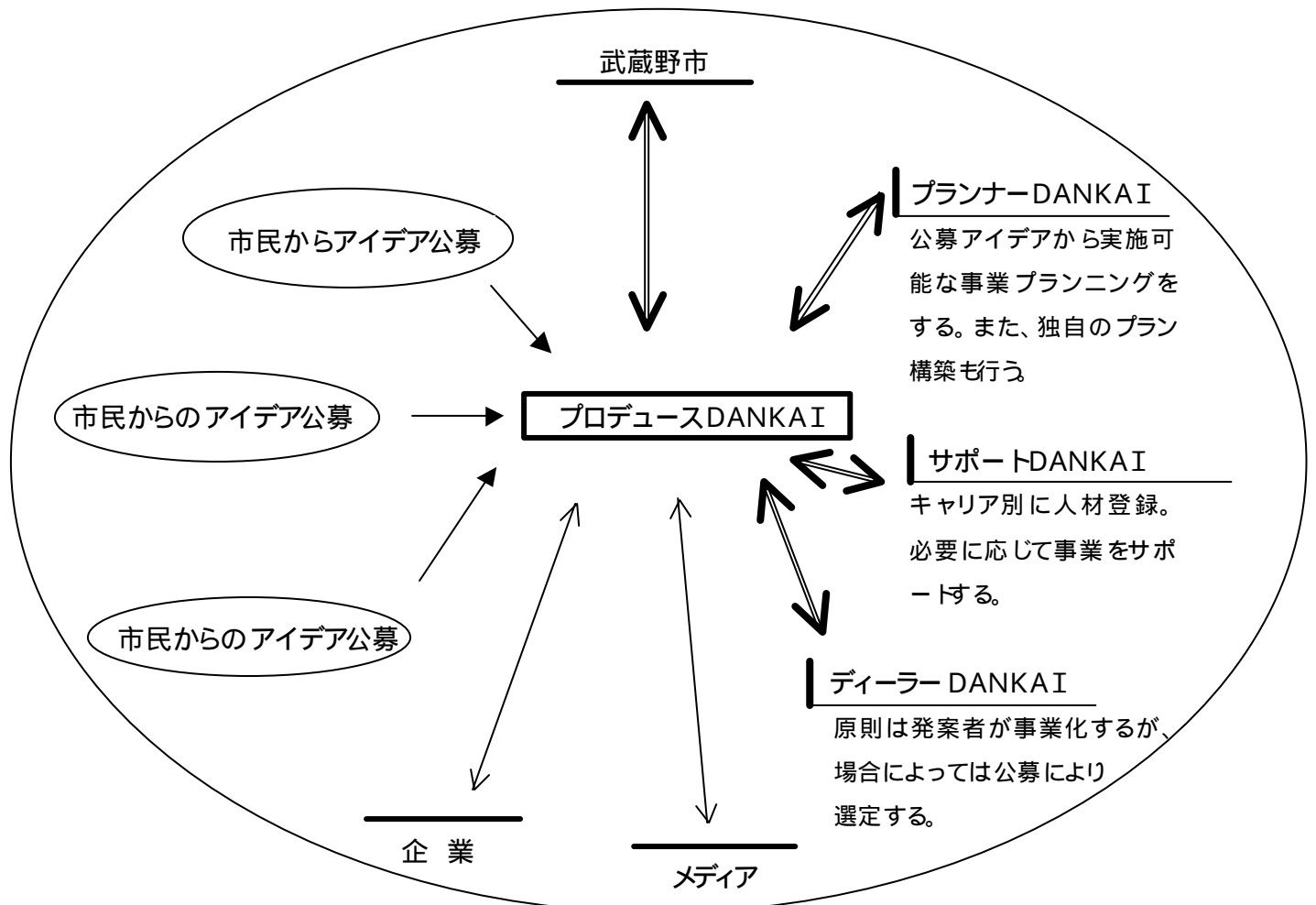
団塊力活用計画<DANKAIプロジェクト>のすすめ

この計画は、市が元気ハツラツ印の団塊世代のキャリア活用を積極的にサポートして、様々な事業を展開していくことを目的とする。

計画をプロデュースするスタッフ。アイデアを創るスタッフ。アイデアを実行するスタッフなど、適材適所にキャリアを配置し活かしていく。

事実、この「団塊世代の主張」市民会議のメンバーからもいろいろな事業アイデアが出されている。しかし、それをつなぐシステムが今はない。良いアイデアもそこで終わってしまう。そこで<DANKAIプロジェクト>を提案したい。

<DANKAIプロジェクト>全体図



<DANKAIプロジェクト>のポイント

<プロデュースDANKAI>は、システムの中核となり、市民からビジネスプランを公募し、事業として成立させるための全ての活動を行う。また、独自のビジネスプランの作成も行う。当初は「団塊世代の主張」市民会議メンバーを中心に構成し、プロジェクトの運営を行う。プラン実現のために企業、メディアなどとのコンタクトも積極的に行う。

ビジネスプランは、市民からの公募を中心に行うが、提案はオープンにし、すべてのプランを検討する。

プランの選定は、<市、プロデュースDANKAI、プランナーDANKAI>の三者で検討決定する。

決定されたプランは、<プロデュースDANKAI、プランナーDANKAI>によって事業計画を練り、必要なら企業、メディアのとのコラボレーションにより事業計画を実施する。

<サポートDANKAI>は、技術、法務、経理等のキャリアを有する定年退職者を、キャリア別に人材登録し、必要に応じて派遣する。

<ディーラーDANKAI>は、ビジネスプランの実行者で、原則は発案者がビジネスプラン実行を担当するが、場合によっては公募により実行団体を選定する場合もある。武蔵野市は、<DANKAIプロジェクト>推進責任者として、このシステムを構築、サポートする。

6 生活 ~個人、人間関係、趣味、文化

高度成長期、仕事は忙しく厳しかった。過去の実績を毎年上回ることが当然のこととされていた時代での仕事であった。女性にとっても、働く場や機会が増え、少しずつではあったが昇進のチャンスも開かれて、時には男性以上に働くこともあった。

仕事に子育てにと「自分自身の時間」に余裕のない年代を過ぎて50歳代半ばになると、自分にとっての生きがいとは何か、どんな生活をしたら心の充実が得られるか、今まで出来なかった夢も実現したい、新しい仲間も作りたい、肩ひじ張らず自分らしく生きたい等「個としての自分」を考えるようになる。

何歳になっても生き生きと夢のある生活をしたい。後に続く若い世代のためにも…。

ところで、私たち団塊の世代にとって、生き生きとした夢のある生活とはどういうものであるのか。

【団塊世代版】生き生きとした夢のある生活 六か条

- 一、 生涯現役で仕事をする
- 一、 人の役に立つ (立っていると実感がある)
- 一、 自分の持つ技術や知識を活かす場がある
- 一、 趣味や好きなことを大切にすることがある
- 一、 学ぶことで更なる成長を実感できる
- 一、 趣味や勉強、ボランティアなどを通して新たな人間関係ができる

「衣食住のゆとり」を大前提に、自己実現の充実感があり、自分の役割を認識できることが、明日への希望と活力につながって、生き生きとした生活となるのであろう。

それぞれの経験やキャリアを活かし、形態は様々ながらも、「生涯現役で仕事」をして社会に貢献し続けたいという気持ちは強い。いつまでも税金を払う立場でありたい。

「人の役に立つ」ことを自他共に実感するためには、仕事を続ける、家族の世話をする、などの他にボランティア活動があるが、常に新しい分野を開拓してきた団塊の世代にとっては、従来のボランティア活動ではあきたらない部分もあり、技術や知識、経験を活かすことができる「人材バンク登録制度」などを作り、新しいボランティアを開拓する必要性を感じる。委員からは、ボランティア活動によって新しいタイプの有償サービスを事業化するアイデアもたくさん出された。

「能力を活かす場」は、前述の「生涯現役」、「人の役に立つ」という夢を叶えるためには、絶対不可欠の要素であらう。

「趣味や好きなこと」について言えば、団塊は、これまでのパターンだけでは満足できない多様な嗜好を持ち合わせている世代である。近年、中高年向けの音楽教室やダンス教室が急速に増えつつあり、高額な楽器が50歳代に売れているとのことであるが、フォークソング、グループサウンド音楽、ジャズ、クラシックと様々なジャンルに親しんだ世代としては、例えば、「老後の音楽といえば演歌」のように、一つにくられることには違和感を覚える。同様に、旅行についても、押し寄せのパックツアーには満足できなくなっている。2～3週間から数ヶ月の短期留学や、興味のある事柄を詳しく知るための予習付ツアーなどが増えている。また、ある時代を共有してきた同世代とともに出向く「同世代思い出ツアー」などもおもしろそうだ。いろいろと体験したいという欲求や知的好奇心を持つことは大切で、また、日常から離れることで刺激があり、若さを保つためのリハビリ効果は大である。しかしながら、年を重ねると健康面に不安が生じて消極的になる。「介護ヘルパー付宿泊旅行」などがあると安心して楽しい。同世代の中で相互にその役割を担うことができれば、ある程度までは需給バランスが保てるのではないかと。

「学ぶ」についてだが、団塊世代に限らず、リタイア後は、オープンカレッジやカルチャーセンターなどを利用して熱心に学ぶ人が多い。学生時代よりも、真に学びたいことが

明確になり、学ぶことで自分自身の成長を実感できることは喜びである。若い学生と一緒にのクラスは、学ぶ側だけでなく、教える先生にとっても、相互に良い刺激になると思う。そのほか、得意分野についてテーマを決めて「人の話を聞こう会」を開いたり、NHKの番組の「ようこそ先輩」のように子供たちに接すること（学校支援ボランティア）なども興味深い。また、「団塊大学」として、私たち自身が「企画」「運営」「受講」の三役をこなしてしまうのもおもしろい。場所については、「新たに建てる」という発想ではなく、学校の空き教室を利用する等、身近な場所を有効活用すべきであると思う。

リタイア後は、ボランティア、趣味、生涯学習等を通して、上下関係、利害関係抜きの「新しい人間関係」を作りネットワークを広げていきたい。例えば、新宿ゴールデン街でお客が自主的に行った文化祭のようなイベントや、展示即売会等、気軽に交流できる場があると楽しい。常に情報交換の場となったヨーロッパの古くからのカフェのように、団塊世代が日常的に顔を合わせ、豊かな発想を育むことができるサロン、カフェのような健全な溜まり場づくりに、空き教室、空き店舗を活用したい。

日常的に、ジャズやクラシック音楽、アートが身近にあり、たとえ生活は質素でも、心身ともに満ち足りた生活を送り、心豊かに毎日を過ごすことができれば幸いである。

提言（委員によるテーマ別各論）草案者

- 1 「生きがい」；藤澤節子
- 2 「健康」；博田美智
- 3 「家族」；井波信一
- 4 「仕事」；小林正宣
- 5 「コミュニティ」；白田永人
- 6 「生活」；山内杏子

おわりに～2015年へのメッセージ

20世紀を振り返れば、それは戦争の百年であった。21世紀も、2001年9月11日の同時多発テロで始まり、アフガニスタン戦争、イラク戦争というテロ撲滅のための戦争とテロ勢力の反撃が繰り返されている。

カンボジアでは学校が破壊され、教師の多くが殺された。世界の紛争地域には約6千万個の地雷が埋設されたまま、人々の生活を脅かしている。地雷の被害は子どもたちに多い。

戦争で傷つくのは子どもたちである。子どもたちは未来の世代である。

戦争は人類の負の遺産である。環境破壊も次世代への負の遺産になる。これらの負債に対処する道を切り開いて、次世代にバトンタッチすることが、我々の世代の責任である。

その方向へ我々を後押しする正の遺産の一つがボランティアであろう。ボランティアの活動は近年、質量ともに高まっており、全国社会福祉協議会の把握では、ボランティア登録数は約700万人、グループ・団体登録数は91,000(1999年の数)と、この20年間で4倍に増えており、実際には登録団体の数倍が地域で活動していることを考えると、社会的にも行政や企業とともに地域社会を構築する第3のパワーとなりつつある。

ボランティア活動参加率を性別・年齢別に見ると、30?40歳代では女性(主婦層)の参加率が高く、社会的活動の3分の1がボランティア活動である。他方、男性は常勤雇用者や自営業を中心に40歳代から参加率が高まり、定年退職者層の参入により、60歳代以上では女性より高い参加率を示している。(経済企画庁編『平成12年度版国民生活白書?ボランティアが深める好縁』より)

また、経済企画庁「国民生活選好度調査」(2000年)によると、日本国民の4人に3人は、社会の一員として何らかの形で社会の役に立ちたいと考えており、今後、ボランティア活動に参加してみたいと回答した人は65%である。特に、40歳代以降の男性の80%以上が社会の役に立ちたいと回答しており、これは女性より高くなっている。

「武蔵野市団塊世代市民アンケート調査(2004年2月実施)」結果でも、「将来はどのようなことを生きがいにしたいか」という項目への回答では、「ボランティア活動」「NPO活動」「自治会・子供会などの地域活動」を選んだ回答者が約50%に達しており、団塊世代の地域貢献への積極的志向が伺われる。

このように、中高年層の社会的活動やボランティア活動への参加意欲は団塊の世代にも共有されており、行政や地域が様々な活動機会や活動創出機会を住民と一緒に考えながら用意し、適切なサポートをすれば、豊かで安心して暮らせる地域づくりへ向けて、今まで以上に高齢住民エネルギーを集めることができるだろう。リタイア後にも社会的活動に参画する団塊世代の元気な後ろ姿を後世に見てもらうことが、未来の世代に、これまでの負の遺産にもかかわらず、将来への展望を抱かせる一番の近道であることを確信する。

資 料

資料 1 「団塊世代の主張」市民会議での話し合いチャート図（略）

資料 2 ～ 4 以下のとおり

資料 2

武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」設置要綱

(設置)

第1条 武蔵野市第四期基本構想・長期計画の策定にあたり、今後数年のうちにその多くが企業組織等を離れることとなる団塊の世代の意見を反映して、市民参加による市政を推進するため、武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」(以下「市民会議」という。)を設置する。

(任務)

第2条 市民会議は、前条に規定する目的を達成するために必要な事項について情報収集及び意見交換を行い、その成果を市長に報告する。

(構成)

第3条 市民会議は、10人以内の委員で構成し、市長が委嘱する。

2 市民会議に座長1人を置く。

3 座長は、市民会議の委員の中から市長が指名する。

4 座長は、市民会議を代表し、会務を総括する。

5 座長に事故があるときは、あらかじめ座長の指名した委員がその職務を代理する。

(会議)

第4条 市民会議の会議は、必要に応じて座長が招集する。

2 座長が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を求めることができる。

(任期)

第5条 委員の任期は、平成16年5月31日までとする。

(報酬)

第6条 委員の報酬は、武蔵野市非常勤職員の報酬及び費用弁償の関する条例(昭和36年2月武蔵野市条例第7号)に基づき、市長が別に定める。

(事務局)

第7条 市民会議の事務局は、福祉保健部生活福祉課に置く。

(その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、市民会議の運営に関して必要な事項は、市長が別に定める。

付 則

この要綱は、平成15年11月27日から施行する。

武蔵野市第四期基本構想・長期計画
テーマ別市民会議「団塊世代の主張」 委員名簿

	氏名	性別	職業	備考
	井波 信一	男	元会社員	武蔵野市緑町在住
座長	栗田 充治	男	大学教授 (亜細亜大学国際関係学部)	中野区在住
	小林 正宣	男	会社役員	武蔵野市吉祥寺本町在住
	博田 美智	女	専業主婦	武蔵野市吉祥寺北町在住
	白田 永人	男	会社員	武蔵野市桜堤在住
	藤澤 節子	女	薬剤師(市内薬局勤務)	杉並区在住
	山内 杏子	女	元会社員	武蔵野市境南町在住

* 50 音順、敬称略

* 任期；平成 15 年 12 月 9 日から平成 16 年 5 月 31 日まで

資料 4

武蔵野市第四期基本構想・長期計画
 テーマ別市民会議「団塊世代の主張」

会議経過

回	開催日	内 容
第1回	平成15年12月9日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・委嘱状交付、座長任命 ・会議の趣旨説明、今後の運営 ・委員自己紹介、委員への応募動機
第2回	平成16年1月27日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ <ul style="list-style-type: none"> * キーワード抽出 * 「健康」、「コミュニティ」分野意見交換
第3回	平成16年2月26日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ <ul style="list-style-type: none"> * 「生きがい」、「仕事」、「家族」、「その他」分野意見交換 * 報告書草案分担決定
第4回	平成16年3月31日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書案検討 ・武蔵野市団塊世代市民アンケート結果概要説明(事務局) ・施設見学検討
第5回	平成16年5月18日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書最終案確認

施設見学

日 程	施 設 等
平成16年4月23日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害者生活寮「天の薨」 ・テンミリオンハウス「きんもくせい」 ・有料老人ホーム「シルバーヴィラ武蔵野」 ・けやきコミュニティセンター ・レモンキャブ5号車

団 塊 力

武蔵野市第四期基本構想・長期計画
テーマ別市民会議報告書

発行 平成16年5月

印刷 武蔵野市福祉保健部生活福祉課

〒180-8777

武蔵野市緑町2-2-28

電話 :0422 60 1848(直通)

e-mail:sec-seifuku@city.musashino.tokyo.jp